
キ・ズ・ナ ♪

usa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キ・ズ・ナ

【Nコード】

N1968V

【作者名】

usa

【あらすじ】

付き合っている幼馴染とうまくいってない・・・。

そんな少女が蘭に相談を持ちかける。

すると、蘭は・・・。

私の名前は加藤亜紀。

帝丹高校の一年生。

ちなみに、彼氏あり。

私の彼氏の田中光は、小さい頃からいつも一緒の幼馴染。

背が高くって、バスケット部のエース。

頭の方は・・・ちょっとあれだけど、とってもカッコいい、自慢の彼氏。

「亜紀。いるか？」

おっと。

噂をすればなんとやら。

「はい。・・・って、なんだ。新一お兄ちゃんか」

目の前にいたのは光じゃなくて、ふたつ上のいとこ、工藤新一お兄ちゃん。

それから、彼女の毛利蘭お姉ちゃん。

「なんだって失礼だな。お前が昨日家に忘れてた本。届けてやった

んだぞ」

「あ・・・ヤバ」

危ない、危ない。

この本は私の叔父にあたる優作おじ様の本。

人気だからすぐなくなっちゃうのよねえ。

「サンキュ、新一お兄ちゃん」

周りからの視線に気づいて、私は慌てて教室から出た。

みんなは新一お兄ちゃんのいところである私をしょっちゅう妬みの対象にする。

そんな良いポジションじゃないんだけどなあ。

確かに、新一お兄ちゃんは小さいころから頭がよくて、まあ・・・光ほどじゃないけど、カッコよかった。

でも新一お兄ちゃんのことをずっと傍で見てきた蘭お姉ちゃんは、新一お兄ちゃんの本性を知っている数少ない人間の1人。

だって新一お兄ちゃんって・・・。

推理オタクでしょ。

ホームズバカでしょ。

キザでしょ。

子供っばいでしょ。

事件と聞けば、どこだって飛んでっちゃっつでしょ。

約束とか普通にすっぱかしちゃっつでしょ。

あとは・・・。

あゝもう！

いちいち挙げてたらきりが無いわ！

「おつ。新にい！」

「よッ、光」

あつ。今度こそ、マイダーリンの登場！

「おはよ、光！」

「ういーす」

何よ、素っ気ないわね。

「蘭ねえもおはよう」

「おはよう、光くん」

蘭お姉ちゃんにはあんなに愛想いくせに・・・。

彼女よりも彼女のいとこの彼女！？

信じらんない！

「ん？なーに不機嫌そうな顔してんだよ、亜紀」
「べつつにい」

最近ずうつとこんな感じ。

光って昔からクールでちょっと冷たいんだよねえ……。

ま、そこが更にカッコいいんだけど。

でも、蘭お姉ちゃんが羨ましいなあ……。

いっつも新一お兄ちゃんと一緒に、すっごく仲良いし。

ケンカしててもすぐ仲直りするし。

それに比べて、同じ幼馴染カップルで、どうもこう違っちゃうのかなあ……。

「どうしたの、亜紀ちゃん」

と、蘭お姉ちゃんが心配そうに聞いた。

「ねえ、蘭お姉ちゃん」

「何？」

「相談があるの。あとで2人つきりで」

私は思い切って言うてみた。

蘭お姉ちゃんは驚いていたみたいけど、OKしてくれた。

「光くんと何かあった？」

放課後の空手部の練習場。

蘭お姉ちゃんは私たち以外誰もいなくなつたときにさりげなく言つた。

「・・・何もないの」

「それじゃあ・・・」

「何にもないから、不安なの」

道着をぎゅっと抱きしめて、私は言った。

「光、付き合い始めてから何か前よりも素っ気ないっていうか・・・話してくれなくなっちゃって・・・」

「照れてるだけよ、きつと」

「だって・・・手もつないでくれないし、キスもしてくんないし・・・」

そう。

光と付き合い合ってまだ何ヶ月にもならないけど、光は私に触れなくなつた。

「付き合い前ならさ、普通に手つないだり、肩組んだりしたのに」

これなら、付き合いなければよかった・・・。

「・・・私と新一もそうだよ」

「えっ？」

蘭お姉ちゃんはニコツと笑った。

「ほら、アイツって、すっごい照れやな部分とかあるじゃない？小1のときだって、私のこと毛利って呼んだりとか」

その時私はまだ幼稚園のはずだ。

従って、記憶なし。

「光くんも一緒よ。あの2人ってちょっと似たようなところがあるから」

そう言えばそうかもしれない。

頭は新一お兄ちゃんの方が倍は良いけど、2人ともイケメンで結構モテてて、スポーツだってできるし。

それに・・・ツンデレ、っていうのかな？

そんな感じだし。

「新一なんかね、私と付き合い始めてからしばらくの間は、私と目も合わせなかったのよ」

「うそっ」

意外！

「うん。それに関して園子が問い詰めたら、照れ臭かっただけ、って言ってた」

園子お姉ちゃん、さすが！

「新一お兄ちゃんがねえ・・・。ちょっとビツクリ」

だって新一お兄ちゃんといえば、いつもクールで冷静沈着な名探偵だよ？

まあ、実際にはクールでも何でもないんだけど・・・。

「でも蘭お姉ちゃんは、そんな新一お兄ちゃんが好きなんでしょ？」

冗談半分で言っただけど、蘭お姉ちゃんは少し頬を赤くして、

「うん・・・。そうね」

って言った。

あとで新一お兄ちゃんに教えてやらないとね。

「蘭お姉ちゃん」

「何？」

「私たちもなれるかな、蘭お姉ちゃんと新一お兄ちゃんみたいな恋人同士に」

「・・・なれるよ、絶対」

何だかスッキリした。

私は一度道着を放り投げて、思いっきり蹴り飛ばしてみた。

ふう・・・。

これで完璧にスッキリね。

「ありがと蘭お姉ちゃん」

「いーえ、どういたしまして」

そう言って笑う蘭お姉ちゃんはとってもきれい。

新一お兄ちゃんが蘭お姉ちゃんに惚れたわけがわかる気がするな。

だって、こんなに素敵に笑える人なんだもん。

その日の夜に、新一お兄ちゃんから電話が来た。

「今日は本忘れてないと思うんだけど」
『ちげえよ。さっき光とちよつと話しててさ』

光と聞いて、私は受話器を慌ててしっかりと握った。

「ひ、光がどうかしたの？」
『いやー。亜紀の機嫌わりいからなんか知らねえか、って聞かれてよ』

「で？なんて答えたの？」
『お前、浮気でもしたんじゃないの、って言つといた』

光がそんなことするか、バカあ！！

私がそう言おうとした時、電話の向こうから蘭お姉ちゃんの声が聞こえてきた。

たぶん、何言ってるの、とか、そんなところだと思う。

『あんま光を困らせんなよ』

新一お兄ちゃんが突然言った。

「・・・は？」

『あのなあ・・・男つてのは、最初は冷たくても、好きな女のことちゃんと考えてんだよ。光だってそうだよ』

そうなのかな？

『光がお前に何したかは知んねえけど、光は光で、ちゃんとお前のこと思ってるんだからな』

「ねえ新一お兄ちゃん」

『あん？』

「・・・偉そう」

『わっ、悪かったな！』

でも・・・ちょっと嬉しかったかもしれない。

そっだよね。

光だって、私のこと、好きだって言ってくれたんだもんね。

悩む必要はないか！

「それじゃあね、新一お兄ちゃん！」
『あつ、おい！』

新一お兄ちゃんはまだ何か言おうとしていたけど、私はそれに構わず電話を切った。

蘭お姉ちゃんに申し訳ないしね。

明日、光に謝ろう。

急に不機嫌になってごめん、って。

そしたら、私もちゃんと聞こう。

光の話。

大丈夫。

私たちの絆は、そんな簡単に壊れない。

絆なら、新一お兄ちゃんと蘭お姉ちゃんにだって負けないもんね。

目指せ！

2代目の帝丹高校伝説のカップル！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1968v/>

キ・ズ・ナ♪

2011年10月7日07時02分発行